

安城市下懸遺跡・惣作遺跡出土の 木簡について

● 永井邦仁

平成20・21年度の発掘調査で、安城市に所在する下懸遺跡と惣作遺跡からそれぞれ1点ずつ出土した木簡について報告する。両木簡は奈良時代の可能性が高く、前者が文書木簡で後者が習書木簡と分類される。特に後者については人名「呉部足国」が記されており、西三河地域の古代史に重要な資料を提供したものと見える。

はじめに

安城市東部を南北に流れる鹿乗川流域は碧海台地の東縁にあたり、沖積地上には弥生時代以降の遺跡が多数所在する。特に古墳時代から古代にかけては、同時代の古墳や古代寺院が台地上に立地することからも、多くの集落が営まれていた可能性が考えられる。愛知県埋蔵文化財センターでは、鹿乗川改修工事に伴う発掘調査を平成10年度から継続して実施しており、表題の遺跡以外にも姫下遺跡や寄島遺跡などの沖積地上の集落遺跡について明らかにしてきた*。そして平成12年度には下懸遺跡で三河地方初となる古代の習書木簡が出土した**。習書とはいえ木簡が出土したことによって、木簡の使用者である官人層の存在やそれが居た官衙もしくは居宅が近隣に存在する可能性が出てきたのである。しかし一方で、1点のみの出土であることや自然流路出土であることから、川上から流れてきたものという評価も拭いきれなかった。これは出土遺構である流路に関する情報が少なかったことに起因するものと考えられる。

その後しばらく木簡の出土はみられなかったが、平成16・20年度の惣作遺跡と平成21年度の下懸遺跡の発掘調査において自然流路から木簡を検出した。前者のうち平成16年度出土木簡は墨痕が見られるものの判読不能であり、平成20年度出土木簡は同年度のセンター年報

に暫定的な釈文を掲載したが、その後の精査で釈文内容を見直した。後者については流路内での出土層位を確認し流路に掘られた溝から出土したことが判明した。本文では平成20・21年度出土木簡2点について報告する。

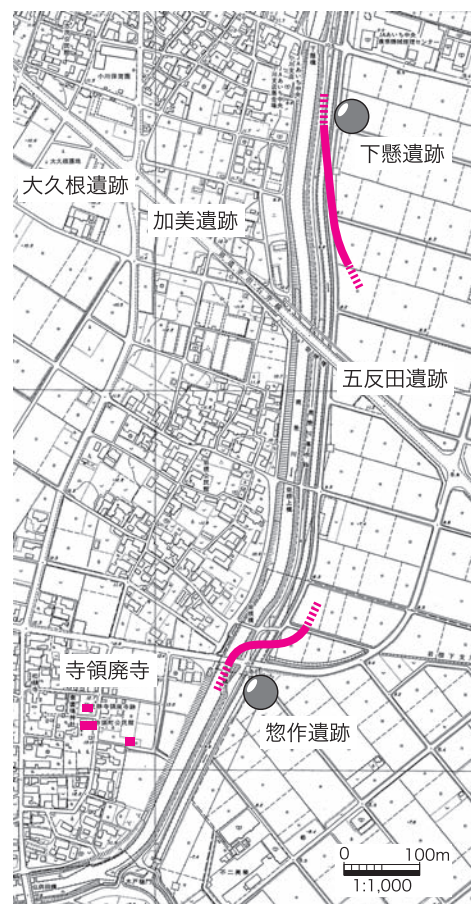


図1 鹿乗川流域南部の主要古代遺跡と自然流路

* ただし鹿乗川から東方の矢作川までの広い沖積地にも遺跡が点在したと考えられるが、これらは一部を除き未解明である。現状では鹿乗川沿いの遺跡が集中的に確認されていることを付記しておきたい。

** 池本・福岡 2001 池本 2006

下懸遺跡出土の文書木簡

下懸遺跡は安城市小川町に位置する。遺跡は鹿乗川左岸の微高地に立地する弥生時代中期～古墳時代前期前半が中心となる集落と、その西～南側を下る自然流路で構成される。自然流路は堆積状況から、古墳時代を通じて埋没傾向にあり湿地化が進んでいたものと考えられる。平成12年度調査では、00A区において習書木簡が流路内の黒色粘土中から出土したが、同21年度調査ではその南隣の09A区の流路内から木簡が出土した(図2-1)。

木簡が出土した流路は、平安時代後期には周辺の微高地とさほど変らない高さまで埋没し、その上面は平安時代末～中世に耕作地化(畦畔)がなされている(図2-2)。一方その下層(NR-2層)は黒色粘土層であるが、この層は7世紀後半の須恵器が上部で出土する植物質を多く含む黒褐色粘土層(NR-3層)を切り込んで掘削された溝に堆積したものである。この溝は幅約5mで検出面からの深さ0.6mの底面が平らな皿形の断面をしている。同じ堆積状況は他の調査区(09C区)でも確認されており、埋没進行中の流路に直線的な溝を掘ったものと考えられる。また今回木簡が出土した地点ではこの溝に対し直角に交差する別の溝も検出されており、沖積地上に区画溝もしくは運河が廻る景観を想像することができる。溝は若干の細粒砂が混じる粘土主体であり、ほとんど水流がない状態であったと考えられる。

木簡は溝の底近くで出土した。後述するように途中で折り切られた下部のみであり、用済みとなったため廃棄されたものであろう。出土地点から5mの範囲内の同層位中では、大小の曲物が出土した他は同層上部の掘り返し(NR-2a層)で須恵器甕小片が検出されたのみであった。また09C区では8世紀中葉の須恵器杯、同区のNR-2a層で灰釉陶器碗が出土した程度である。したがって溝の堆積は8世紀前半～9世紀前半という年代幅でしか把握できない。

木簡は折り切られた下部である(図2-3)。一部破損しているものの下端が確認できる。最大幅は3.8cm、下端からの残存長13.8cm、厚

さ0.3cmである。樹種は不詳。柾目の板材である。文字は片面のみで確認できるが、釈文からすると文書の途中のようでもあるので、出土しなかった上部の反対面に文の続きが記されていた可能性が高い。

釈文中の「米物受被」は明瞭で、その下の「賜」と合わさって米に関わる物資の受給あるいは支給に関する文書であると考えられる。残存部分からはこれ以上の意味を汲み取ることはできないが、このような受給関係文書が使用される場面として公的なものを想定する必要がある。その点で文書木簡の出土は意義深い。なお、「受被」は漢文としては文字配置が正しくないが、日本語化が進んだ表記方法と評価される。

また文書木簡が、習書木簡から南へ数十mの地点で出土したことも注意したい。今回の精査によって習書木簡も溝中からの出土であった可能性が高くなった。しかも習書木簡出土地点付近では数点の8世紀後葉に位置づけられる須恵器が相伴遺物として出土しているが、発掘された溝全体を通じて見れば奈良～平安時代の遺物が比較的多い地点であったともいえる。このことから両木簡が上流から流されてきたと理解するよりは溝近くの沖積地上に木簡を使用する場を想定するのが妥当であると考ええる。

加えて注目される遺物として木簡出土地点から南へ10mの溝堆積層から出土した斎串3点がある(図2-4)。形状は統一されたものではないが、これらは約5m範囲内でまとまっていることから出土地点で使用または廃棄されたものと考えられる。斎串は都や地方官衙で行われた祭祀で用いる道具であり、木簡とともに遺跡の評価を考えるうえで重要な資料といえる。しかしながら現状では、溝付近に官衙もしくは豪族居宅を想定するには当該期遺物の出土量が少なすぎるという問題も残されている。

惣作遺跡出土の習書木簡

惣作遺跡は安城市木戸町に位置し、奈良時代は碧海郡小河郷に属していたと考えられる。下懸遺跡から鹿乗川を約0.7km下った地点の沖積地上に立地する。南西200mの段丘上には7世紀後半に創建された寺領廃寺がある。寺領廃

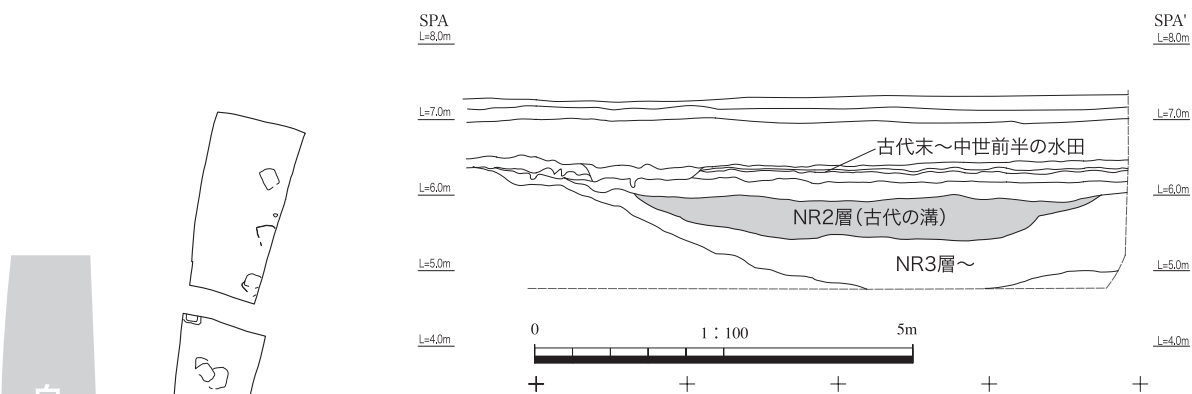


図2-2 下懸遺跡の流路と溝の土層断面(09A区、S=1:100)

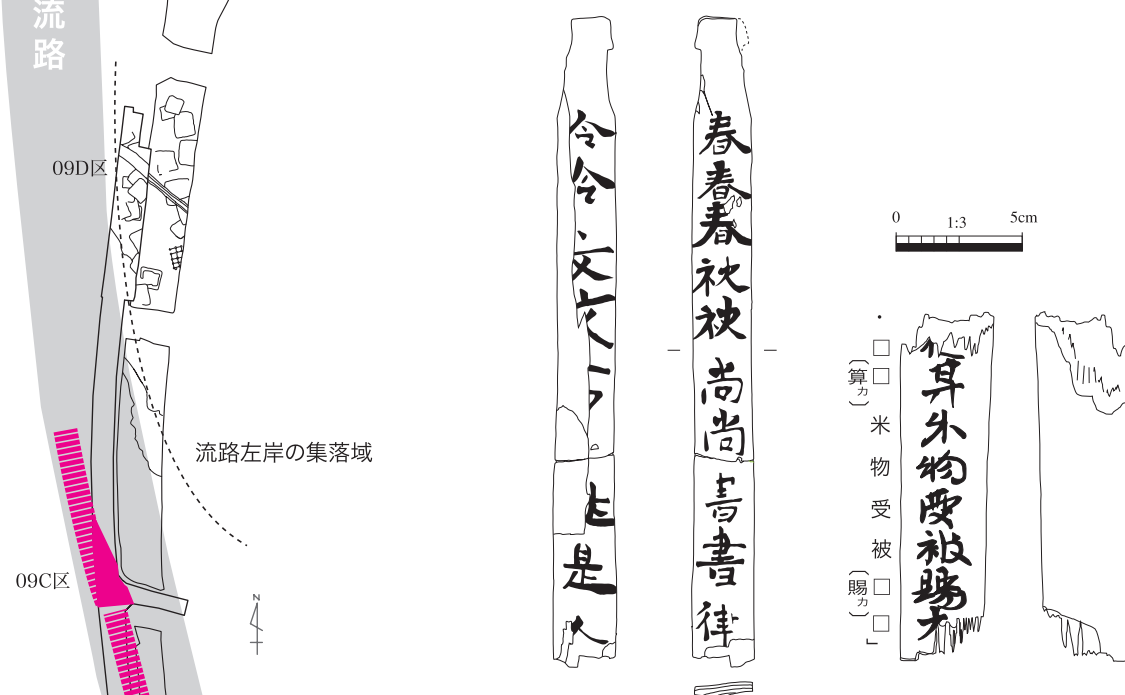


図2-3 下懸遺跡出土木簡実測図(左:習書木簡 右:文書木簡)

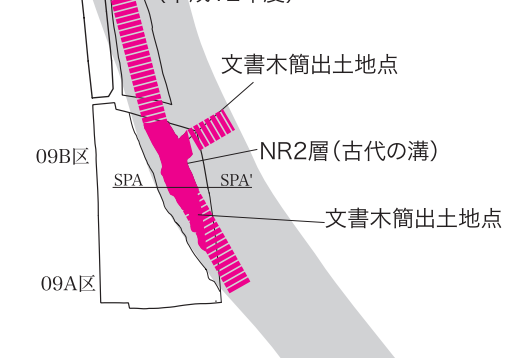


図2-1 下懸遺跡調査区全体図と流路および古代の溝
(弥生時代～平安時代前期の遺構配置)

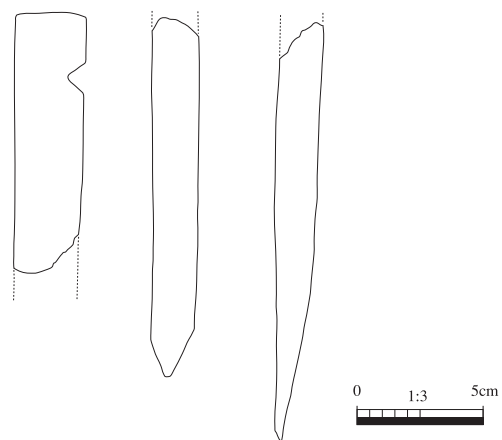


図2-4 下懸遺跡出土斎串実測図(S=1:3)

図2 下懸遺跡の概要と出土木簡実測図及び釈文

寺は8世紀後半段階の瓦も多く出土しており奈良時代後半にも活発な造営をおこなっていたと考えられている*。

惣作遺跡は、これまでに当センターと安城市教育委員会によって計6,495㎡が発掘調査されている。判読不能の木簡（木簡1）は平成16年度に04B区の自然流路NR01中の木製品集中地点から、習書木簡（木簡2）は平成20年度に08A区の自然流路003NRから出土した。両出土地点は同一流路内にあり地点間の距離は15mである。

自然流路は調査区内を東西方向に抜けている（図3-1）。流路南岸は発達した自然堤防があって、北東方向から下ってきた流路はそれを迂回するようにして一旦西流しその後段丘に接するあたりで南西へ向きを変えるとみられる。位置関係から推測して、下懸遺跡で検出された自然流路の延長である可能性がある（図1）。本遺跡でも古墳時代を通じて埋没過程にあった点や、奈良～平安時代は黒色粘土層が堆積するなど状況は似ている。しかし黒色粘土層については掘り返した痕跡はなく自然堆積である。層の厚さは、流路中央で最大約30cmの堆積となるものの岸近くでは5cmほどにとどまる。黒色粘土層の上位には中世以降の遺物が検出される砂質層があり、中世以降も流路として機能していたと考えられる。

木簡2は流路北岸付近の黒色土層中から出土した。ほぼ中央で折り切られて上部と下部が分離した状態であったが至近距離で出土した。このことから木簡が水流で移動した可能性は低いと考えられる。また木簡1が出土した木製品集中地点も近く、流路北岸からの廃棄が想定されよう。なお同層中からは灰釉陶器が出土しており、堆積時期が奈良時代～平安時代中期と考えられる点は下懸遺跡と同じである。

流路北岸の自然堤防上には掘立柱建物が想定されるが、どのような性格のものであったかは判然としていない。一方、流路の南側には周溝のある掘立柱建物が1棟検出されており平安時代と推定される（宮腰2009）。奈良時代に限定する遺構は少ないが、8世紀後葉の須恵器が一定量出土していることや、流路南側（10B

* 川崎・永井2004

区）で「寺」と底部に墨書された須恵器杯が出土した東西方向にのびる溝があることから、段丘上に立地する寺領廃寺の造営や維持に関わる施設が展開していた可能性が想定される*。

木簡は折り切られた状態であったが、接合復元すると全長57.3cm幅3.2cm厚さ0.7cmのやや厚みのある板状である。また等間隔に直径0.4cmの孔が貫通している。このような厚さや穿孔があることから、何らかの木製品を木簡へ転用した可能性が考えられる。表面は多数の削痕があり、判読できた文字以外にも墨痕がみえることから、何度も墨書と削除を繰り返したもののと思われる。文字は両面に書かれ、墨が残るA面に対し表面の腐食が進んで墨の部分が浮き上がって残存したB面がある。両面ともに下端近くに墨痕があるが、A面のそれは戯画のようでもあり今後の検討が必要である。

文字のうち「道」「大」は、木簡の習書文字を集成した渡辺晃宏によると高い頻度で習書される文字であるという**。しかし「巻」は頻出文字ではないため、何らかの目的がありそうである。寺院に近い点を考慮すると仏教の経巻などが考えられよう。下部にある「天平」は他に比べるとやや小さめに記されている。その下に「護」があるが、「天平」に関連すれば天平神護という年号に関わる可能性もある。一方下の「田」に関連させるのはやや難しいか。

A面下端近くには「呉部足国」とあり人名と判断される。「呉」は異体字が用いられている。他の習書文字が一画々々を明瞭に記すのに対し「足国」は字形がやや崩れている。習書者本人が自分の名を記したのかもしれない。ここでは人名に注目して若干の指摘をしておきたい。

正倉院文書にある貢進歴名帳***には三河国碧海郡皆見郷出身の呉部浄足とその戸主として呉部皆麻呂の名が記されている。同文書には尾張・三河国出身者が列挙されており、天平19(747)年～天平勝宝元(749)年に作成されたものと考えられている****。これによって、奈

* 宮腰ほか2009。惣作遺跡では銅滓が多く出土し、寺院に供給する銅製品の加工場だった可能性もある。

** 渡辺2009によると「道」が最多で「大」は3位。「得」は52位、「本」は181位。

*** 任官にあたってその戸籍を調査し書き出した文書。当該文書は丹裏（丹の包み紙）に転用されたもの。

**** 『愛知県史 資料編古代1』文書番号214

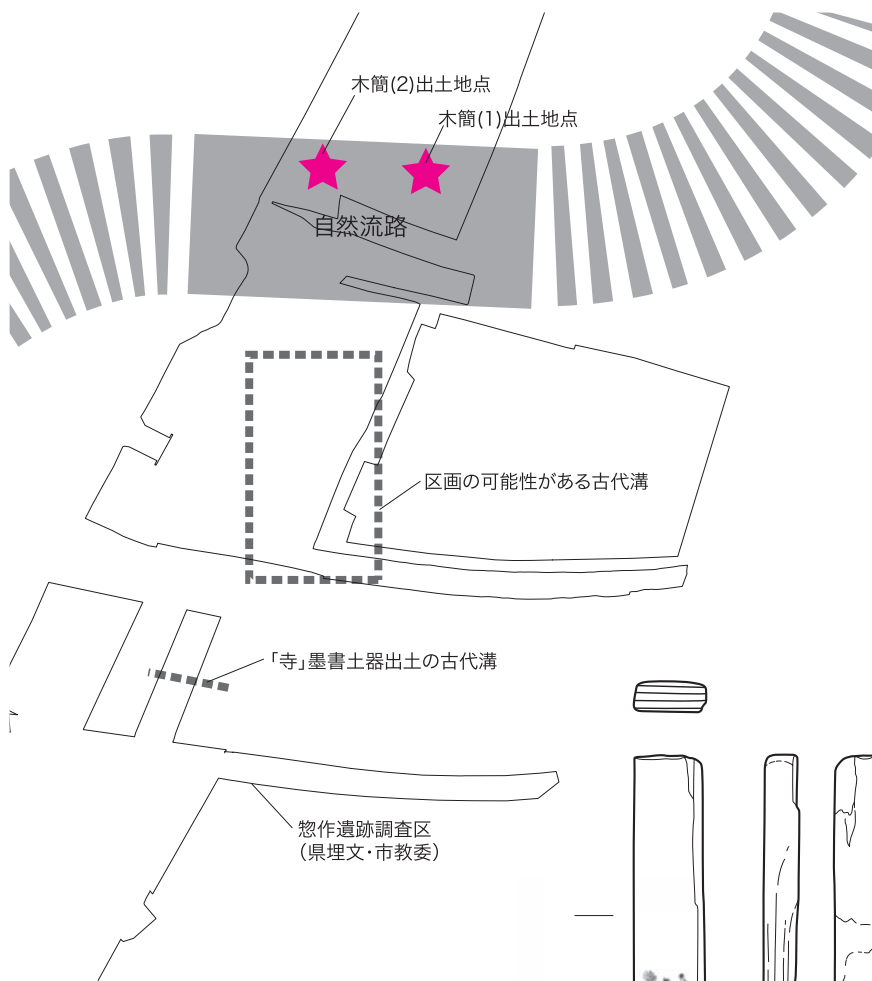
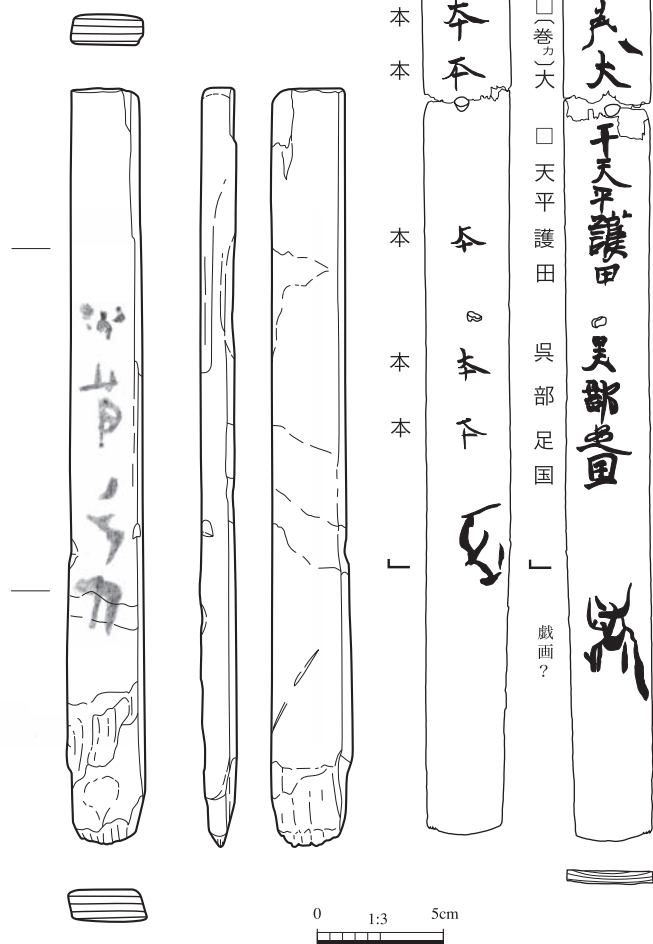


図3-1 惣作遺跡の流路概要と木簡出土地点



図3-2 惣作郷の比定地(明治24年陸軍測量図に加筆)



木簡(1):平成16年度出土
(宮腰2009より転載)

木簡(2):平成20年度出土

図3-3 惣作遺跡出土木簡実測図(S=1:3)

図3 惣作遺跡の概要と出土木簡実測図及び釈文

良時代に碧海郡の呉部氏が都へ出仕する人材を輩出していたことがわかるものである。呉部浄足は、天平 20(748) 年 8 月の正倉院文書に「童子 呉部清足」と記された人物と同一の可能性が高いといわれている*。呉部清足は、少僧都良弁の宣により請経使（経典を借り受ける使）として派遣されている。良弁の下にいたことから東大寺で働いていた可能性が高い。

その本貫である碧海郡皆見郷の位置については、「あざみ」から「あざい」へと読みが転じたと考えて西尾市東浅井町および西浅井町付近に比定されている**。この比定地は惣作遺跡から南東約 1km の距離にある矢作川左岸の丘陵地に位置し、近い位置関係にある（図 3-2）。「呉部足国」を本人が記したと考え、彼もまた皆見郷を本貫とする呉部氏の一員であり、そこから惣作遺跡の場所に赴き文字を扱う仕事に従事していたものと思われる。

また呉部氏は、その名から渡来系氏族と考えられ、おそらく大化改新以前は「呉」氏に支配された部民であろう。先の貢進歴名帳には尾張国愛智郡荒大郷に久例連（くれのむらじ）がいたことが記されており、これとも関連が考えられるという***。文献史料で確認される奈良時代における呉部氏の分布は、三河国碧海郡・美濃国本栖郡・播磨国揖保郡である。このうち美濃国本栖郡栗栖太里の大宝 2 (702) 年戸籍には、戸主漢人部鳥の寄人として呉部安麻呂と 3 人の子の名が記されており、渡来系氏族間でのつながりが想定される****。一方、碧海郡にも漢人部氏が所在したことが知られている*****。郷名までは伝わっていないが美濃国の事例を参照すると呉部氏と漢人部で集住していた可能性もあろう。

参考文献

- 天野暢保 1996 『『和名抄』記載の西三河の郷について（下）』『安城市歴史博物館研究紀要』第 4 号 安城市教育委員会
池本正明・福岡猛志 2001 「下懸遺跡出土の木簡について」『研究紀要』第 3 号 愛知県埋蔵文化財センター
池本正明ほか 2006 『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 144 集
川崎みどり・永井邦仁 2004 『寺領廃寺』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 12 集
鈴木正貴 2009 「惣作遺跡」『年報平成 20 年度』愛知県埋蔵文化財センター
竹内理三ほか 1961 『日本古代人名辞典』3 吉川弘文館
永井邦仁 2010a 「下懸遺跡」『年報平成 21 年度』愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2010b 「惣作遺跡」『年報平成 21 年度』愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2011 「北野廃寺は三河国造の寺か」『考古学フォーラム』第 20 号 考古学フォーラム
西宮秀紀ほか 2007 『新編安城市史 通史編第 1 巻原始・古代・中世』安城市
宮腰健司ほか 2009 「惣作遺跡」愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 158 集
渡辺晃宏 2009 「日本古代の習書木簡と下級官人の漢字教育」高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店

今回の出土文字資料は、仏教や寺院に関わりの深い渡来系氏族が古代寺院である寺領廃寺の近くに所在した可能性をより高めた点で注目される*****。

おわりに

以上、鹿乗川流域の遺跡から出土した木簡 2 点の紹介とそれをめぐっていくつかの指摘と憶測を述べてきた。鹿乗川流域は低湿地であるため、今後も木簡の出土が期待される。しかしそれだけでなく西三河地域の中でも碧海郡域は、墨書土器を中心とする出土文字資料が多くみられる地域であることも注意しておかねばならない。特に鹿乗川流域の古井堤遺跡などでは 8 世紀中葉段階から墨書土器が多数確認されており、文字の普及が比較的先行していた可能性がうかがえる。

謝辞

下懸遺跡・惣作遺跡出土木簡の釈読については福岡猛志氏（日本福祉大学名誉教授、当センター専門委員）、古尾谷知浩氏（名古屋大学准教授）にご指導いただきました。また惣作遺跡木簡については渡辺晃宏氏（奈良文化財研究所史料研究室長）、浅野啓介氏（同研究員）、桑田訓也氏（同研究員）中村一郎氏（同主任）のご指導・ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

* 竹内 1961

** 天野 1996、西宮 2007 など。

*** 福岡猛志氏のご教示。

**** 竹内 1961

***** 延暦 20 年 (801) に漢人部千倉売がいる（『愛知県史 資料編古代 1』文書番号 432）。

***** 寺領廃寺が奈良時代以降も積極的な寺院造営を行ない得た要因として、渡来系氏族がそれに関与した可能性を指摘する（永井 2011）。